

お薬のしおり



No.189 (H29.12)

東京医科大学病院 薬剤部

骨粗鬆症とくすりについて

皆さんは骨粗鬆症という病気をご存じでしょうか。骨粗鬆症は、高齢になってから発症することが多い病気で、高齢化の進む日本では患者数が増加傾向にあります。また、性別では圧倒的に女性が多く、50歳代から急速に増えはじめて、発生頻度は男性の約3倍とされています。今回はそんな骨粗鬆症についてお話ししたいと思います。

○骨粗鬆症とは？

骨は、骨を壊す「骨吸収」と、骨をつくる「骨形成」がサイクルをつくって新陳代謝し、常につくり替えられています。この骨の代謝は骨を壊す破骨細胞と言われる細胞と骨を作る骨芽細胞という2種類の細胞がバランスよく働くことにより行われていますが、このバランスが崩れてしまうと、骨の量が減少したり、骨の質が悪くなることで骨の強度が低下し、骨折するリスクが大きくなります。この病気を骨粗鬆症と言います。骨粗鬆症により骨折しやすい部位は、背骨、脚の付け根、手首、腕の付け根です。

○原因は？

骨粗鬆症の原因としては、加齢による骨量の低下・閉経によるホルモン分泌量の変化・無理なダイエットや運動不足、喫煙や習慣的な過度の飲酒などが挙げられます。

○骨粗鬆症の治療薬は？（院内採用薬）

骨粗鬆症治療薬には働きによって①骨が壊されるのを抑える薬、②骨の生成を促す薬、③骨に足りない栄養素を補う薬の大きく3つに分類されます。

①骨が壊されるのを抑える薬

●SERM製剤（エビスタ[®]錠・ビビアント[®]錠）

⇒選択的エストロゲン受容体モジュレーターとも言います。エストロゲンという女性ホルモンには、この新陳代謝のバランスを保つ働きがありますが、このお薬は閉経後女性を対象に女性ホルモンと同じ作用で骨が減るのを抑えます。



●ビスホスホネート製剤（ボナロン[®]経口ゼリー/点滴・フォサマック[®]錠・アクトネル[®]錠・リカルボン[®]錠・ボンビバ[®]錠/シリンジ・リクラスト[®]点滴）

⇒骨を壊す破骨細胞に働きかけ、骨密度を増やします。また、薬剤によって投与間隔が異なります。（1日1回・週に1回・月に1回・年に1回）内服薬は、食事の影響を受けて吸収率が低下しやすく、また消化器症状を起こしやすいため、「起床後、最初の飲食前に多めの水（180mL以上）で服用し、30分は横にならず、水以外の飲食物や薬剤の摂取を避ける」等の注意が必要です。

●抗RANKL抗体薬（プラリア[®]皮下注）

⇒骨を壊す破骨細胞に働きかけ、骨密度を増やします。6ヶ月に1回皮下投与するお薬です。

●女性ホルモン剤（エストリール[®]錠・エストラーナ[®]テープ）

⇒閉経後女性を対象に、女性ホルモンであるエストロゲンの作用によって骨が減るのを抑えます。

②骨の生成を促す薬

●副甲状腺ホルモン製剤（フォルテオ[®]皮下注・テリボン[®]皮下注）

⇒骨を作る骨芽細胞に働きかけ、骨の形成を促します。高い骨折予防効果と早朝の疼痛緩和が期待できます。

③骨に足りない栄養素を補う薬

●活性型ビタミンD₃製剤（アルファカルシドール[®]錠・カルシトリオール[®]錠・エディロール[®]錠）

⇒腸からのカルシウム吸収を助けます。

●ビタミンK₂製剤（グラケー[®]カプセル）

⇒骨の形成を促すとされるビタミンKの摂取不足を補います。



最近では、骨粗鬆症治療薬の種類も増えており、生活習慣にあわせて剤形や用法を選択し、服薬することで、さらに治療が続けやすくなりました。骨粗鬆症は痛み等の自覚症状がないことが多く、定期的に検査を受けるなど、日ごろから細やかなチェックが必要です。また、骨の強化に欠かせないカルシウム・ビタミンD・ビタミンKなどを積極的にとったり、骨を丈夫にするために適度な運動を行うことも心がけましょう。～お薬のことでご不明な点やご不安な点がある場合には、医師又は薬剤師までご相談ください。～